

## 座談会 「百年史」から「百五十年史」へ

二〇一二年二月一日(火) 一三～一六時 大隈会館N二〇三会議室

出席者 佐藤能丸氏(元大学史編集所嘱託)

松本康正氏(元大学史編集所嘱託)

川口 浩氏(元大学史編集所非常勤嘱託)

〈司会 大日方純夫〉

司会 正田健一郎先生が本年八月二四日にお亡くなりになりました。正田先生は、『早稲田大学百年史』の編集に従事され、一九九〇年一月から退職の九五年三月まで、四年余、大学史編集所の所長もおつとめになりました。百年史は、一九七八年の第一巻刊行以来、二〇〇年近くの年月をかけ、一九九七年九月、本編五冊、別巻二冊、総索引・年表一冊をもって完結しました。一方、昨年、二〇三二年の創立二五〇年を期して『早稲田大学百五十年史』を編纂・発行することが正式決定され、その準備がスタートいたしました。そこで、本日は大学史編集所の嘱託として百年史の編集に携わられた佐藤能丸さん、松本康正さん、川口浩さんをお願いして、正田先生を偲びつつ、百年史の経験などを話していただいて百五十年史を展望したいと考え、座談会を企画いたしました。まず、もつとも早くから編集に

かわられた佐藤さんに口火をきっていただければと思います。

## 一 経験としての百年史

### 編集の基本ライン

佐藤 百年史というと、やはり大学史編集所の初代所長小松芳喬先生ですね。編集所が設置されたのは一九六九年六月ですが、小松先生は翌年一月から定年で退職される七六年三月まで所長をつとめました。しかし、その後も嘱託として九二年三月まで、ずっと編集に携わっておられました。一方、正田先生は一九七一年に百年史の編集員となり、九〇年に所長に就任されたのです。ですから、小松先生が退任なさって、正田先生にバトンタッチされた。百年史というと、何といても小松先生、正田先生ラインで行われたということです。これは、結果的にはものすごくよかったです。つまり、小松先生は、歴代の総長から全幅の信頼をうけ、全部任せるということで編集にあたられました。その小松先生の手法、見識をそのまま正田先生が継がれて、百年史を完結された。正田先生もまた、総長はじめ大学本部から全幅の信頼を得て、何一つ本部から干渉を受けなかった。これが思い出として、一番強調したいことです。

松本 私は小松先生の大学院での弟子にあたります。研究テーマはイギリス経済史でしたが、大学の歴史や教育にも関心があるということで、大学史編集所に引つ張ってみようと思いつかれたのではないかと思います。大学院在学中は正田先生は留学中でしたので、正田先生と実際に顔をあわせたのは、大学史編集所の会議の場です。編集会議では、原稿を読み合わせながら、いろいろな意見を喧々諤々たたかわせました。そうしたところで正田先生の学風とか、大

学史編纂に対する態度とかが、だんだん伝わってきました。

司会 正田先生門下の日本経済史ということでは、やはり川口さんですね。

川口 私は一九七六年の四月から丸一〇年間、大学史編集所におりました。私が最初に大学史にいったときの所長は小松先生だと思っていましたが、そうではないんですね。村井資長先生とか、清水司先生、西原春夫先生とか、歴代の総長が所長をされていた。しかし、私にはずっと小松先生が所長だったというイメージがあり、実態としては小松先生がすべてをリードされていたと思います。私にとって大学史といえば小松先生で、正田先生は原稿が遅いという（笑い）、そういうイメージですね。ですから、あの百年史は小松先生がおつくりになったというのが私のイメージです。学問的に正田先生を偲ぶという意味でいえば、私が最初に先生を知ったのは一九七一年で、学部二年生の時に日本経済史という授業をとったのが最初の出会いだと思います。それで、ある意味で物の見方とかを教えてもらったのですが、同時に、正田先生はほとんど切れ目なくいろいろな学内の役職をやっています。私にとっては、そのイメージも非常に強いですね。

佐藤 総長が所長を兼任されていても、運営委員会の時だけです、ご出席は。めったにお出でにならない。小松先生、正田先生に全部お任せになった。

松本 正田先生も小松先生のお仕事をちゃんとご存じでした。退職まで所長をされ、その後も顧問とせずと百年史に直接携わっていらつしやうった。編集会議でどんどんものをおつしやうたり、いろいろ督促されたりとか、そういうことをされてましたね。



司会（大日方 純夫）

### 木村流の第一巻

司会 実際の編集執筆ということでは、木村毅先生、中西敬二郎先生が中心となり、一九七一年一〇月に、滝沢武雄先生と正田先生が編集員ということが入られたのですね。

松本 実際のリーダーシップを誰が握ったかというところ、やはり第一巻は木村毅先生です。書き方も面白いんですね。ところが、学術的にみた場合かどうかという、そういう不満は残っているんです。木村毅先生がなくなった後、指導権が小松先生に移り、それから中身が随分変わりました。

佐藤 第一巻はやはり木村流の百年史なんですよ。読んで面白い。

松本 けれど、事実を突き詰めると、何だか変だというところがある。

佐藤 はっきりいって、第一巻の時は、僕らみんな木村先生、中西先生の助手です。材料を集めたのは助手役です。膨大な材料をつかって先生方が執筆なさる。おそらく自前の資料でお書きになったのは木村毅先生だけです。だから、一巻と二巻以降とは違う。二巻になって役割分担が大体できてきたのです。

川口 一巻は学問的なものかというところ、確かにそうじゃないという側面があるかもしれません。一巻があったおかげで、二巻以降が自由になったんじゃないかと思えます。一巻にはある意味で何でも書いてあるわけですよ。とくに、大学が始まる前のことが書いてある。そこはある意味で何でもありみたいな話ですよ。そういうことがあるので、二巻以降、こういう幅のなかで書いていいということがあって、狭い意味での大学史ではなくなった。やはり一巻が

あつて、二巻以降もそれが可能になったのではないかと思います。

松本 流れとして大隈重信がきて、小野梓がきて、まさに大学というだけではなく、日本全体のなかでとらえているでしょう。

佐藤 ただ、一巻には『小野梓全集』の編集とその成果が生かされていないのです。まだ『全集』が出ていなかったから。ですから、『小野梓全集』の成果を入れたら、違ったものになったかもしれない。そのことを思うと、心残りですね。もうちよつと学術的な成果を反映しなかった。

松本 結局、木村毅先生が亡くなって、中西先生も亡くなられる。そうすると、現職の先生方に執筆をお願いするということになる。しかし、授業をかかえているとか、いろいろ役職をかかえているとかで、結局、私たちのところにお鉢が回って来てしまふんですね。

佐藤 実際のことをいうと、そもそも正田先生が忙しくなつたんです。それで、正田先生のご担当が遅れに遅れたわけです（笑い）。どんどん大学の方で忙しくなる。そこで正田先生が担当する箇所を書くお鉢が僕らに回ってきてしまった。正田先生が担当するところがなし崩し的に皆に回ってきてしまった、ということですよ。

### 梓組みと構成

司会 運営の仕方、決め方とかはどうだったのでしょうか。助手というか、スタッフとの関係などについて、お話しただけだと思います。

松本 一巻の頃は、木村毅先生がすべて目次をたてられたと思います。二巻以降から変わってきました。二巻以降、そこに小松先生が加わるようになって、あと木村先生、中西先生、このお三方で決めて、その後、三巻以降になると

正田先生、滝沢先生、木村時夫先生などが加わりました。私たちは目次づくりには一切関わっていません。

佐藤 目次だては、何といっても小松先生。僕らは、出来上がった目次に対して、誰がどこを担当するのかということでした。最後まで。

川口 誰が書くかということもありますが、やはり基本的な枠組みの問題だと思っんですね。全体の方針が明確でないと、単なる論文集みたいなものになってしまうと思います。百五十年史を書くなら、基本的にどのスタンスで書くのか、どういうことを、どういう枠組みのなかで書くのかということと示すということではないかと思えます。人的配置は、その後でそれを実現するために、何が最も適切かということで、二次的に考えればいいことで、一番の中心は基本方針、基本的な枠組みだと思えます。

佐藤 そうですね。大枠というか、骨格というか、フレームが大前提だと思えます。これについてはいろいろな意見がありますが、早稲田大学というのは、近代日本の縮図とっていい大学だと思えます。ですから、百五十年史を戦後日本と早稲田大学というかたちで、つまり早稲田大学を日本の現代の縮図のようなスタンスで書くのと、早稲田大学の高等教育ということを書くのでは、随分と違ってくる。章だてが変わってくるのです。後者ですと、ただ小ぢんまりとした早稲田大学史になる可能性もある。どっちにするかですね。

川口 広い視点で見ているのは、百年史のいいところだと思っんですね。ですから、教育史の専門家がいなくてある種のマイナス面もあるけれど、逆に帝国大学史のようにならなかったのは、いいことだと思います。そうでなければ、大学を歴史的に位置づけるといふことにはならないですね。事実だけを書くと、年表を文章にしたようなものになってしまいます。

佐藤 大学で出す百年史なり、百五十年史は、大学による自己点検だという姿勢が大事だと思います。そこにはある

種の緊張関係があり、単なる制度史ではないという意味があると思います。

## 二 百年史の構え—どう書いたか

### タブーと自己点検

川口 学校のことを書くにしても、何年何月に何がありましたみたいな話ではなくて、たとえば早稲田騒動のように、今からしてみれば大変なことでしょうけれど、かなりはつきり書いてありますね。制度的に言えば、学長がかわりましたということだけの話ですが、そうではなくてああいった、内紛があつたという書き方をしてあるということが早稲田のいいところだと思います。

松本 それは、小松先生がよくおっしゃっていたことです。もう早稲田騒動は五〇年以上たっている、書いていいんだ、はつきり書こうと。ただ、やはり昭和四年の第二学館紛争などは、ちよつとオブラートに包まなければいけないところがありましたね。

司会 だんだん制度史になってくる…

松本 もちろん私たちは若くて血気にはやっていましたから、やはりありのままを書くべきだという意見は強かったのです。正田先生も、大学批判をやるべきところはやるべきだとおっしゃっていました。

佐藤 早稲田騒動くらいまではほとんどタブーはないですよ。ただ、その後の大隈家のことについては、タブーというよりも、立ち入らないということが、暗黙のうちにありました。やはり昭和五年の早慶野球戦切符事件でも何でも、大隈家を担ぎ出す勢力がいたわけです。しかし、大隈家が大学を法人として代表したことは一回もないです。こ



川口 浩氏

れが他の私立と全然違うところです。高田早苗さんをはじめとする大学の執行部が、それだけ世襲的な支配を退けたということです。

川口 どの席かは忘れましたが、正田先生が学問の独立にはいろいろな意味はあるけれど、一つには大隈家からの独立だということをおっしゃっていました。大隈さんにお金をだしてもらっているから、財政的に自立しなければいけないという話です。大隈家との関係は建学以来、重要な問題だったのでしょうね。

佐藤 面白いのは、大正のはじめの『中央公論』に「高田学長と鎌田塾長」という論文があるんです。まだ大隈さんが元気な時に、安部磯雄先生が書いてるんです。高田早苗学長の地位は安泰である。まさに大隈さんの依託をうけているんです。高田さんが一番力がある。その点、慶應の鎌田栄吉塾長は大変だ。早稲田大学をしょって立つて推進した。だから、高田さんが一力がある。その点、慶應の鎌田栄吉塾長は大変だ。舅、小舅にさんざんにいじめられて、と書いているんです。福沢家がそれだけ勢力をもっているわけです。福沢家の連中がいるから、鎌田さんは思い通りにやっつけていけない。その点、高田学長は安泰であると書いている。

司会 大隈さん自身はやはり政治家で、狭い意味の教育者ではありませんから、その点、福沢とは違う関係になるのかとも思います。

佐藤 金は出しても口は出さないというような雰囲気があったりました。明治四〇年の維持員会記録を読むと、大隈さんが憲政本党の党首をやめて早稲田に来る。その時、記録に付箋で特記事項が記してあるんです。大隈伯爵を総長に推戴するのは創設者であるがゆえにあらず、高邁な名誉職としてお願いするのだということです。感激しました。学



校を作ったからではなく、総長は名譽なんだと。だから、代表権を与えないのです。あえて記録に書いたんですね。高田さんたちは大隈さんをそういうかたちで遇したということです。

司会 書き手と編集委員会とか大学側の間で見解がズレるというか、評価をめぐって問題化するということはとくにはなかったのでしょうか。

松本 大学側、総長側から、この記述がまずいということは、一切なかった。ただし、顧問会にはいろいろな学部の先生やOBの方がいらつしやるので、お祝い事を書けばいいのではないかという発言もありました。

佐藤 百年史はお目出度いことなのだから、大学の内紛などは書くなということです。あんまり穿鑿するなというわけです。

松本 百年史とは別ですが、数年前にデジタルアーカイヴス、デジタル歴史館というのをお手伝いした時も、お目出度いことだけを書くべきだという意見がありました。

司会 目出度い記念だけがいいのかという点では、正田先生も『早稲田学報』に掲載された『百年史』完結に寄せた文章のなかで、「自画自賛の百年史としてはならない」、「短所を率直に短所として反省する（歴史化する）」と、ころに、明日に向けての積極的意味をもつ歴史を書くことができる」とお書きになっています。負の部分、克服すべき部分を書かないと歴史ではないということですね。

松本 そうです。そうでなければ自己点検にならないでしょう。

### 戦争と戦没者名簿

松本 早稲田大学として、いまだに後悔の念があるのは戦時中です。やはり田中穂積総長も大学の存続ということ

一番大事に考えたら、日本の政府の方針に従わざるを得ないという、苦渋の選択だっただろうと思います。そういうことで、とくに学徒出陣のように、戦争と大学がどうかかわってきたのかということ、小松先生も書きたいことはいろいろあったと思うけれど、なかなか正面切って書けなかった。そこで、戦没者名簿というかたちで入れることを考えられたのでしょう。川口さんの大学史において絶対に欠かせない仕事は、戦没者の名簿をつくったことです。あれは先駆的な業績ですよ。

佐藤 大学が鎮魂するということ、あれはすごいと思う。早稲田の一つの姿勢として評価してもらいたいと思います。あの後です、新聞記事とかなかで慶應がやりだしたことがニュースになったのは。

司会 小松先生のそうしと思いは、どのあたりからきたのでしょうか。

松本 小松先生は外国のことをよくご存じで、大学をめぐる、大体キャンパスのなかに戦争でなくなられた方々の名簿が刻まれた石碑が建っているのです。そういうことも先生の頭のなかにあって、早稲田でも顕彰すべきだということを前々から考えていらつしやつたんです。でも、そのためには名簿がなければ作りようがなかった。川口さんの名簿が完成した段階で、平和祈念碑をつくろうと理事会にはたらきかけて、これが実現したんですね。いまでも大隈庭園内の祈念碑の下には、百年史の戦没者の名簿が納められています。その後、木下恵太さんが引き継いで改訂を加えています、それも中に入れていけば、と思います。やはり、早稲田大学にとって、学生の存在が一番重要ですからね。それなのに、学生たちを戦場に追いやったという思いが田中穂積先生にはあつたと思います。田中先生はたまたま戦争中に亡くなられたから、その思いや気持ちはわからないのですが。

佐藤 百年史を執筆した一番の収穫は、田中穂積さんの日記を読んだことです。日記を読んで、京口元吉先生とか津田左右吉先生がやめた経緯がわかりました。それから、敗戦直後については、教員適格審査の問題もありますね。小

松先生は報告書にもとづいて非適格者の名前をずっと書きました。審査をする前に自発的にやめた人もいた。あのことをどうするのかということも、一つの課題になるかもしれない。今後、あれ以上のことを書くのか、書かないのか。松本 あの時の適格検査というのは、かなり政治的な動きがあった。思想が悪かったからとは、必ずしも決めつけられないんです。日本の近現代史では、ああいう審査はどのように評価されているのか。それとの抱き合わせで書きなおしてみる必要があると思います。

司会 川口さん、名簿調査のご苦労とか、手続きとかについてはいかがですか。

川口 一番最初はすでに刊行されているもの、たとえば『きけわだつみのこえ』とか、『雲ながる果てに』とか、そうした公になっていくものから早稲田関係を抜き出すということでしたが、それだと限界があるので、一番の、最大の資料は校友会名簿の元になっている個人カードでした。一枚ずつ見ながら、戦死とか何とかいうことを書いてあるものを引っぱり出したのです。

佐藤 あと『早稲田学報』ですね。ただ、戦争がどんどん進むと、『学報』が薄くなったり、出なくなってしまう。川口 最初の、まだ中国での戦争の頃は大きな記事になっているんですが、事態が悪化してくるにつれて書かなくなる。ですから、最大の資料元は校友会名簿でした。正確性については何ともいいかねますが、むしろ時間をかけて直していったほうがいいと思います。

司会 名簿そのものが百年史の本文のなかに出てくるというかたちですね。

川口 最初は『早稲田学報』に載せました。名簿が出来ていく過程で、知っていることを教えてくださいということでした。

佐藤 別冊に入れなくてよかったですね。本巻に入れたことによって、ちゃんと大学側の姿勢を示したことになります。

す。大変な分量だったけれど。

司会 いま、課題となっていてるのは、厚生労働省がもっているリストをどのようなかたちで活用できるのか、国側の資料と突き合わせて行く必要があるのではないかとということです。

松本 私は去年、大学史資料センターで、戦争すぐあとの教務関係の資料を見ていたんですよ。そうしたら、大学に籍を置きながら戦争で亡くなった方の名簿が出て来んです。おそらく、そうしたものを作るということは、文部省に報告するためでしょう。国にもあるんだらうけれど、大学の方にも控えがあつて、びっくりしました。

学生のこと、大学院のこと、そして――

川口 大学というのは制度の問題でもありますが、やはり教育研究機関ですね。その教育研究を実現するのが制度ですから、制度はもちろん大切ですが、どうしても上から目線になりがちで、学校側から見ると、研究の側面ではそれでいいという教員がいて、何をしたかとか、どういう研究をしたかという話になるんですが、研究の側面ではそれでいいかもしれませんが、しかし、教育の側面から見たら、むしろ学生は何をしていたのかということが基本的な枠組みとしてあつた方がいいのではないかと思います。

松本 他の大学の歴史を見ても、学生の動向に目を向け、暮らしぶりまでかなりのページ数を割いているのは、やはり早稲田でしょうね。それだけの配慮はあつたんですね。今後も続けていけるかどうか。

川口 それから、実態として早稲田の学生は、いろいろなことをやっているんです。事実としてそういうものが積み重なって、一三〇年になつているので、それを無視することは出来ないし、また、理念的にも学生を抜きにして学校はそもそももないのです。単なる研究所なら研究のことだけ書いていればいいですが、教育機関なので、やはり教育の



松本 康正氏

対象としての学生に軸足を置かないと、完全なものにはならないと思います。

佐藤 ただ、戦前と戦後では大学の構成が違っていると思います。戦前は学部中心ですが、戦後は大学院が充実していて、学部だけでなく、大学院にもかなりのスペースが割かれるべきだと思います。どういうふうにして章だてをするかはともかく、各学部のうえにある大学院として学部の延長でとらえるのか、それとも大学院だけで別枠にするのか。大学院というのは、戦前の場合とは違うかたちで、シフトは大学院にうつっているような気がするんです。どう扱うべきか、考えはまとまりませんが。

川口 今は二階建てではない大学院もありますしね。こういうものが出来ましたということは書かなければなりません。二百年史ではなくて、二百年史ですかね。百年史だって、戦後はこういうことがありましたというものが中心ですね。昭和二〇年以降のことは百五十年史にお任せしますというものが基本的な立場なんじゃないでしょうか。

松本 ある程度時間がたたないと冷静な評価がくだせないということですね。

川口 ですから、どこまでが百五十年史で書けるかということを見計らって、その後は事実としてこういうことがありましたと書くしかないのではないですか。

佐藤 例えば、例の昭和五五年の入試漏洩問題は どうするのかということなど、初めからちゃんと合意しておかなければ駄目ですね。

川口 大きいのはやはり所沢の問題でしょう。新校地をどうするのかということとは、学校の根幹にかかわることです。

佐藤 それについては、百五十年史に書かないとしても、きちんと記録を残しておくことが必要です。ヒアリングだけはしておいた方がいいです。

### 三 資料集めをどうするか

#### 資料を集める仕組み

司会 資料について、百年史段階で達成されたことと、されていないことを確認させてください。

佐藤 資料のことで注意しなければならないのは、東京専門学校の管轄は東京府知事だけれど、一九二〇年に大学令にもとづく大学になると、文部省の直轄学校の帝国大学と同じことになります。東京府時代の資料については、東京都公文書館で撮影して、大学史の記要に活字化しました。しかし、その後、文部省になってからは、百年史ではまったく使っていません。調べないというよりも、その頃になると、文部省往復書類、つまり文部省に出した書類の写しが見んな残っているのです、その写しで処理したわけです。国の公文書館に見に行ったら、まだ公文書館ができてきたる時で未整理だった。これは無理だということで、教務関係資料のなかの写しを使ったのです。

松本 早稲田は昔からの記録が残っている方ですね。しかし、要は基本となるどういう資料がどこにあるかがわかり、それにいつでもアクセスできる仕組みをつくらなければいけないということです。資料センターで全部集める必要はないけれども。たとえば学籍簿。これは大学にとって非常に重要な資料だけれど、今はセンターの所員は見られませんが。私の時には、学籍課の人も、外部からどういう人かという問い合わせがあると、学科の正式名称を確認したいといつて私のところに来ました。そこで、実際に学籍簿が保管されている倉庫に私自身も行って調べることできたん

です。要するに、人と人とのつながりがあった、オリジナルな資料が見られた。

佐藤 制度化が進んでしまうと、意外に敷居が高くなってしまおう。

松本 先ほどの川口さんの話のように校友会個人カードを使うことができた。しかし、いま、校友会名簿をつくっていません。これも、これからでてくる問題です。何年何月に卒業したということを確認する時に、やはり学籍簿がないと裏付けがとれないわけです。今は書類を出して、調べてくれということしかできない。直接、倉庫に行って見るということができなくなっています。

司会 本部関係については、理事会とか評議員会とか、そういった関係資料ですね。今回、百五十年史ということ、整理を進めています。たとえば逐次刊行物である『学報』などは、よりどころとして一番経過が追えるということになるのでしょうか。『学報』の総目次はないですね。

佐藤 総目次がないために、古いところは全部手書きで書いたんです。この際、戦後だけでもつくってほしいですね。それから、評議員会記録、商議員会記録、あれは最低限、必要です。それから、早稲田大学一覽、年報を全部揃える必要があります。

#### 学部資料と委員会資料

司会 百年史の時に学部史は学部任せだったのか、それとも学部関係の資料も集めることがあったのか、そのあたりはいかがですか。

松本 本編は大学史編集所の担当でしたが、学部史は各学部にお任せでした。そして、学部関係の資料を私たちが集めたということは、まったくありません。結局、大学の自治は教授会の自治でしょう。教授会の資料は全然手に入れ



佐藤 能丸氏

られないのです。無理でした。

司会 本部関係は次第に資料受入れのルートができてきていますが、学部関係についてどうするのか、頭が痛いところですね。

佐藤 非現用文書を廃棄する前に大学史編集所に集めるということにしたけれど、それが徹底していませんね。

松本 事務系の方は人事異動があるでしょう。この人には伝わっていたけれど、後任者が引き継いでいないということもある。

佐藤 これはもう昔語りになるけれど、松本さんとか僕は、政経学部の屋根裏の、ハトの糞だらけの資料をやつと持ち出したり、一〇号館の共通教室のところに焼却炉に行つて、その資料を焼いちゃ駄目だといつたり、トイレに行くた

びに教務課の捨てたものを屑籠から拾つて来たんです。そうやって資料を集めた。僕らにとつては宝物ですからね。

松本 毎年、大量に作っていないながら、残っていないものがあります。学科配当表、大学一覽、学部要覽、これがないんですよ。政経学部は正田先生がたまたまお持ちだったからそれをいただいたけれど。各学部に全部手紙を出して、もし使わないなら一部くれと言ったら、ほとんど持つていないんです。驚いてしまいました。これらの資料があれば、たとえば、この先生はこういう授業をやるということがはつきりわかるんだけれども、それが全然ないものだから、わからなくて困ってしまった。こういう科目を担当しますよとは書いてあつても、実際にどんな授業をやつたのかはわからない。川口さんが言ったように、教育機関であるということ考えた時に、すごく重要なものですよ、講義要覽とかそういうものは。それなのに、年限が過ぎるとどんどん捨ててしまう。ただ、毎年のを集めようとすると、



あつという間に増えていくんです。ただ、最近では電子化されていますから、集めるのは楽かもしれない。これがないと、本当に不便です。

**司会** 逆に電子化された資料をどう扱うのかという、新しい問題もありますね。

**松本** 戦後、大学では、ものごとを決めるときに委員会をつくるんですが、この委員会の資料がなかなか手に入らない。これも、委員だった先生方が亡くなられた時に、あるいは退職された時に、いただいたり預かったりしたんです。

**佐藤** 百五十年ということで一番関心があるのは、本庄校地関係資料とか、所沢校地関係資料とかがまとまっているのかどうかです。

**松本** 戦後はものすごくたくさん学部とか研究科とかができました。その時に認可を申請しますね。その書類の控えがないんです。全部は揃っていないんです。人間科学部はあった。社会科学部もあった。学部ができる時の経緯などは、そこを見ないとわからないことがあります。

**司会** 百五十年史については、そのへんに大きなポイントがあります。学部に任せた学部史ではなく、それぞれの新設のプロセスとか認可の問題とか、これは全体にかかわってくるのだと思います。

**松本** 組織的にやるなら文部科学省にはその原本があるのですから、それが見られるルートを作っておくことは必要でしょう。現用で使っているものですから、おいそれとは見せてくれないでしょうが。

**司会** 校友会とかOBとかはどうでしょうか。資料があるかどうか。

**佐藤** 校友会は期待できません。資料をちゃんととっておくところではないから。

## 学生関係の資料

川口 大学史編集所に初めて行った頃、最初にやらされた仕事は、たしか運動部の話だったんです。明治のことで何もわからなかったけれど、当時の『学報』などを見たりして、こんなことまで書くのかと思った。その時はこれが当たり前だと思ったんです。学生を抜きにした百年史なんてあり得ないわけですから。というよりも、大学の根幹は学生なので、そういうことを書くのは、あの頃は当たり前だと思っていました。その後、いろいろな学校の年史を見て、そこが早稲田のいいところだと私は思っています。

佐藤 やはり制度史ではなくて、全体として文化史なんですよ。硬軟とりまぜてというか、その良さが正田先生はどちらかというときだっただんじやないですか。制度史はおもしろくないという。

司会 学生ということでは、運動部やサークル関係の資料はどうでしょうか。

川口 運動部については『学報』ですね。それぞれ野球部百年史など、そういうものを出している部もありますが、基本的には『学報』です。

松本 テニス部とかなんとか、資料があるから取りに來いということで行ったことはありますが、継続的に資料をあつめるようなセクションではないでしょう。幹事がかわればどんどんなくなってしまうんです。

川口 運動部にそれを期待しても無理ですよ。もともとそういう体質ではないので。もしそれをやるとすれば、大学に引き取ってもらうというか、預けてもらうということをしなければいけない。窓口は大学史資料センターか、競技スポーツセンターですね。スポーツ博物館を設置してほしいという一般的な要求はありますが、とにかくそういう資料受入れ機関がないと、運動部に資料をとっておくことを期待しても無理です。

佐藤 それから、文科系のサークルがあります。

松本 一応、大学公認のサークルは継続的な資料が残されるかもしれないとしても、非公認の同好会関係はまったく無理ですね。世代が継続していかない。

川口 競技スポーツセンターでは、毎年、年鑑のようなものを出していますから、それを見れば競技成績とか、そういうことはわかりますが、どの程度書くかによりますね。

#### 写真をどうするか

司会 百年史では学生向けの写真集は別だてだったわけですね。

佐藤 あの写真集『都の西北』は外注です。別だてですが、大学史編集所の仕事としてやりました。

川口 カメラマンを雇ったんです。プロの写真家ですから、すごくよかったですね。古いものは既存のものですが、司会 その後、佐藤さんはデータベースということで写真を整理されましたね。

佐藤 僕が整理したのは、大隈家にあつたいわゆる原版写真、それから図書館にあつた写真です。それらを全部集めて、糊づけし、データベースに入れたわけです。あれは過去の遺産で、新たに集めた写真ではないんです。百五十年史のための戦後の写真となると、皆からもらうということで、一回はローラー作戦を展開することが必要です。校友などに対して、写真を下さいということで。しかし、おそらく集まる可能性はかなり小さい。ですから、こちらで集めるしかないですね。

松本 後は、新聞・雑誌の写真をどうするかですね。著作権の問題がありますが、結構いい写真があるんです。

司会 佐藤さんが作られたデータベースは、手持ちの写真ですね。

佐藤 これからは手持ちがない。だから自分で集めなければなりませんね。

松本 あらためてつくろうという時に大々的に声をかけたのが印刷所でした。早稲田大学印刷所が『早稲田百年』という六〇〇頁を超す写真集を出版しましたが、その時、新しい写真がいろいろ集まって、結局、大学史編集所に譲っていただいたんですけれど、その後、そういうことをしていないんです。

佐藤 僕がデータベースにしたのは、誰が写って、いつということと、ある程度論証したわけです。誰が写っていて、どこで、ということがないと、資料的な意味がない。データベースの写真は、『早稲田学報』が出て以後は、そこに載っている写真を全部コピーしたんです。各巻に写真を入れる時に、『学報』の写真が非常に役立ちました。戦後の『早稲田学報』の写真はデータベースにしておくといえます。これはものすごく後で使える。今からやった方がいい。

松本 写真資料だったら広報課ですね。学生生活課とか、そういうところで持っている可能性が大いにあります。また、建物がどのように変遷したのかということでは施設課とかに行けば、ちゃんと残っています。『学報』とか、『キャンパスナウ』とか、『年報』とか。『早稲田ウィークリー』とか、全部、データベース化した方がいいですよ。

#### 四 百五十年史のつくり方

##### 稿本・事典とWeb版

司会 百年史の場合、稿本をつくって定本をつくるという形をとったのですが、稿本に対していろいろ意見はよせられたのですか。

松本 ほとんどなかったですね。タイプ印刷よりも読みやすいということだけでした。小松先生は稿本を一頁ずつ切り取ったものを糊で原稿用紙に貼って、周りの余白にいっぱい赤で書きいれたんです。

司会 今回はそういうことはできないだろうと思いますし、現在はパソコンが発達していますから、そういうことをしなくても原稿はきれいにできると思います。

松本 実際は運営委員の先生方に配りましたが、全く反響がなかったですね。

司会 それから、実はレファレンスの場合、百年史は流して書いていますから、追えない部分があるのです。制度史がキチンとなっていないために、答えられないことが出てきます。読むにはいいのですが、調べる場合に困ります。

松本 そうですね、始まりと終わりとが系統だてて書いてありませんから、ですから、レファレンスの場合には、そういう虎の巻があるといい。佐藤さんが前からおっしゃっていたのは、「早稲田大学事典」ですね。あと、年表もほしいと。これは、しょっちゅう改訂していく、あるいは追補していく必要があるような、そういう性格のもんです。

佐藤 何といっても年表、出典を入れた年表が必要ですね。百五十年史についても、今から大学史資料センターで年表をつくるスタッフを配置する必要がありますね。

松本 百年史がスタートした時には、年表すらつくられていなかったんです。年表を作っておいて、たとえば就職課ということがでてきたら、現在に至るまでの就職課の流れをフォローしておくとか、そういう形でだんだん目次が作られてくると思うんです。

佐藤 慶應義塾は二年前に『慶應義塾史事典』、それから今回、『福沢論吉事典』を出しました。ですから、レファレンスは非常に楽です。僕も事典を計画したのですが、結局、費用の面でだめでした。

司会 現在、人名事典とか資料とかは、データベース化してホームページに出し、更新していこうと考えています。

松本 そうですね、検索ができますし、一回つくってしまえば更新が簡単ですからね。

## —設置基準の大綱化と早稲田の新展開

司会 では、最後に百五十年史にむけてのアドバイスやアイデアなどをいただければ幸いです。

松本 新しい原稿を一九九〇年頃から起こすと、大学設置基準の大綱化は欠かせないと思います。これをきっかけにして各学部で委員会が設けられて、学部のカリキュラムをどう組み替えるかが検討され、決まっていきました。これを是非ヒアリングしてほしいですね。全学部のその時の担当者に集まっていたいで各学部の様子を話していた。ついでにヒアリングが終わった段階で、その先生が手元に持っている資料を提供していただきたいですね。各学部ごとに最終決定は活字で公表はされているんですが、実はあれは出来上がった本体であって、その前にいろいろな考えや意見が出されたはずです。まだ公表しては困るというものもあるかもしれませんが。

司会 文部省なり文部科学省なりとの関係で、大学がどう対応したかということですね。

松本 日本も大きな曲がり角だったわけでしょう。大学のあり方を本格的に変えなければならないということになったわけですから。

佐藤 その点を押さえるのが、新制大学の設置基準とか、それから九〇年代とか、それから最近、大学の建物の設置基準が変わったでしょう。関東大震災以来の高さ制限がなくなっただけです。行政指導とか、法制度的なもので大学の変化を見るといっても、一つの見方ですね。

松本 建物がどんどん変わっていますね。ですから、施設課に行って、早く写真などを手に入れる必要があります。写真をデータベース化することですが、これは、あくまで大学がもっているものに限られます。

佐藤 建物という点では、理工の建築などの先生がいると助かるね。学び舎としての建物、いかに快適なゼミの部屋かといった観点から建物を考えることができる。



座談会風景

司会 奥島孝康総長、白井克彦総長の時期には、大学が次々と新規の展開をしていますので、聞き取りが大切だと考えています。

佐藤 でも、変わり始めたのは西原総長からでしょうね。職員改革など、大ナタをふるいました。経営母体としてのあり方が大きく変わりました。

川口 毎年毎年居心地が悪くなっていますが、それは仕方がないと思います。一九九一年の大綱化から今までの二十年間、低成長がつづいていて、授業料は上げられず、学部や建物をどんどん作って、一体どうなるのかという感じですね。

佐藤 その時代、時代の生き残り作戦に成功したから、百年が、そして今があるわけです。生き残り作戦に成功した老舗の大学なんです。しかし、その生き残りの作戦は、その時の当事者が選択しているのだから、そのことを押さえておくことが大事ですね。

司会 それから、もう一つ、大きな特徴は国際的な展開かと思えます。

川口 「早稲田」から「WASEDA」へ、ですね。

司会 同時に研究ですね。外部との関係で研究費をいかに獲得するのかという、ある種の作戦の展開ですね。これも新しいところだと

思います。これらの点で、百年史とは違う要素がいろいろ入ってくると思います。

### 紙の未来と百五十年史

松本 あと二〇年後に今のような紙の形態の本がどうなっているのかという問題もありますね。

司会 それが一番不安なところです。百年史の時には、まったくなかった問題ですね。

松本 電子的なものになると、長いものを読もうという気にならなくなるのではないのでしょうか。一つのテーマについて一画面かせいぜい二画面。この程度でおさめなければならなくなる。

佐藤 でも、やはり電子媒体は局部的で微視的です。全体像という点では、紙媒体は、まだまだ有効ですよ。

松本 紙媒体を意識して百五十年史をつくるのか、それともコンピューターでのディスプレイを想定して作るかによって、全然作り方が違ってくると思います。ただ、それを作るための資料集めとかの手順は同じです。

司会 紙だけを想定するのはリスクが大いなので、そのプロセスで準備を蓄積し、ある段階で方針を決めたいと考えています。百五十年史では、完成を待つのではなく、同時進行でWeb版ということで、資料やデータ、写真などを使えるようにし、活用しながら、整備・更新をはかっています。とくに今、「早稲田学」ということでやっていますので、学生にもいろいろと素材を提供しながら、活性化をはかりたいと考えています。それから、百五十年史をテコにして資料が集まる仕組みをつくり、アーカイヴズ機能を強化しようと考えています。ですから、結果としての百五十年史だけでなく、プロセスとしての百五十年史を実現したいと思っています。本日は、長時間にわたって貴重なお話をいただき、ありがとうございました。